



鹿屋体育大学

National Institute of Fitness and Sports in Kanoya

国際武道シンポジウム

International Budo Symposium

実施報告書

Report

禮

武道の〈心〉を伝え育む
— 「礼法」再考 —

The Mind of Martial Arts : Rules of Decorum

2008.12.7^{SUN}

午前に青少年対象として柔剣道のワークショップを開催しました(武道館)

「技をレベルアップし、礼法のセンスを身につけよう」

指導講師：柔道/棟田康幸氏 剣道/宮崎正裕氏

開催場所：鹿屋体育大学水野講堂 事務局 / TEL・FAX 0994-46-5172 URL <http://budo2008.nifs-k.ac.jp/>

フランスの柔道修行者の礼法意識

— 嘉納治五郎研究の視点から —

イブ・カドー

今日は、次の問いについて、皆様と幾つかの考えを共有したいと思います。

問い：嘉納治五郎の研究の視点から、フランスの柔道修行者は、エチケットについて、どのような認識を持っているのか（特にお辞儀と礼儀について）。

この論文を2つの主要な部分に分けます。

最初の部分では、嘉納治五郎は、エチケットについて、私たちに、何を語ろうとしたのかについて皆様とともに認識を共有したいと思います。第2の部分では、最初の部分の結論で私たちが直面するエチケットに対する、フランスの柔道修行者の行動に焦点を絞ります。

I. 嘉納治五郎の著作から見るエチケット（礼儀）

A. 著作

礼儀に関する嘉納治五郎の著作の中には、もちろん、嘉納治五郎が、大日本教育会の依頼で柔道について書いた『柔道一斑並ニ其教育上ノ價值』（明治22年）があります。それから、『同窓会雑誌の発刊につきて』（明治26年）、『勝負後の講話（つづき）』（明治32年）、『講道館柔道講義—第八回』（明治33年）、『柔道を学ぶ者の心得について—第二回』（明治42年）、『青年修養訓』（明治43年）、『柔の形』（大正4年）、『柔道家の品格』（大正6年）、『柔道教本上巻』（昭和6年）、そして最後に、『乱取の練習および試合の際における注意』（昭和10年）があります。日本語で書かれたこれらの著作に、柔道（柔術）の短い文章を付け加えなければなりません。それは、1940年の東京オリンピックが近づいた1937年に、観光業委員会によって編集された70ページの小冊子で、嘉納治五郎によって英語で書かれたものです。

明治22年（1889年）から昭和12年（1937年）までの48年間に、「礼儀 / エチケット」について書かれた11もの著作を数えることができます。

B. 道場において

まず、嘉納治五郎が、道場におけるエチケットについて、私たちに語っていることについて注目してみましょう。

「いつお辞儀をしなければなりませんか？道場に入るとき、道場を出るとき、型または乱取りの前と後。[B-i-S6-9]。さらに、練習の前と後で、道場で、上位の修行者に対してお辞儀をしなければなりません。[B-ii-M33-5]

お辞儀には、2つの形があります。畳に座った座礼と、立ったままの立礼です。

座礼の正しい距離について、1900年のときは、少し複雑であったと思います。（相手の体が平均的な大きさ）。嘉納治五郎は、1931年には、もっと簡単にして、1.5メートルの距離を取ることにしました。[B-iii-a-1-M33-2][B-iii-a-1-S6-9]

お辞儀の正しい仕方についても、1900年と1931年との間には、いくらか相違があります。特に爪先の位置について相違があります。1900年には、爪先で立たなければなりませんでした。しかし、1931年には、

爪先は、のばさなければなりません。[B-iii-a-2-M33-2] [B-iii-a-2-S6-9]

毎日の稽古では、必ずしもあまり正式でなければならないということはないと、嘉納治五郎は、ときどき語っていました。しかし、どんな場合でも、1900年には、手は畳につかなければなりませんでしたが、1931年には、手と共に、頭の動きも重んじられました。[B-iii-a-3-M33-2] および [B-iii-a-]

このときには、立礼について、良い距離については、1931年に述べられているだけですが、座礼とは同じです。しかし、嘉納治五郎は、もっと広くとることができると言っています。[B-iii-b-1-M33-2] 立礼の良い仕方は、1915年に一度述べられていますが、それは、柔の型について述べています。そして、1931年には、嘉納治五郎は、言葉ではなくて、それを描写するために写真を発行しています。[B-iii-b-2-T4-2] [B-iii-a-2-S6-9]

勿論、座礼や立礼のお辞儀の良い仕方は有ります。しかし、欠いてはならないもの、最も重要なものは、形の中に込めるものです。心の誠実さ、形についての注意深さです。[B-iv-S6-9] [B-iv-S10-6]

嘉納治五郎について、道場での柔道で、お辞儀は何のために行うのか？

お辞儀は、柔道においては、2つの主要な理由で必要です。先ず第1に、柔道は闘いであるからです。そして、あなた方が相手を倒そうとし、押さえつけようとする目的は、進歩するためであり、対決は進歩に向けての方法であることを、闘いの前後で、明確にしなければなりません。[B-v-a-6-9]

第2の理由は、柔道を効率的に行いたいなら、真剣であり、集中した状態を尊重しなければならないからです。[B-v-b-32-7]

次のステップに進みましょう。柔道は何のために行うのか？嘉納治五郎は、講道館柔道は身体の鍛錬、精神の修養、勝負の修行という三大綱目を掲げて創始せられたのであると語っています。1915年から1925年の間に、4番目の綱目が現れました。柔道の理念を、社会生活に実行することです。礼儀は、2番目のもので、精神修養または修心法です。

1915年2月に、嘉納治五郎は、柔道の目的を、次のように一時的に定義しました。(己を完成し、世を補益する)

1899年の著作では、この考えから離れることはなく、この考えを、エチケットについての彼の考えの基礎にしました。[B-v-d-32-7]

C. 社会において

しかし、お辞儀は、嘉納治五郎にとって、何故それほど重要なのか？

ここで、11の著作の中で、2つは柔道とは関係がなく、7つの著作においては、柔道について語る際には、嘉納治五郎は、主として、毎日の生活における行動について語っていることに注目する必要があります。嘉納治五郎は、最初の柔道についての著作を書く前に、倫理学(倫理学一歴史、批評/倫理学トハ如何ナルモノゾ)についての著作を出版していたことを想起します。彼の最初の興味の中心は、一人の人間の周囲の社会との間の関係、他の人々との関係、それらの相互関係であったことを理解することができます。彼がこのように書いています。「己というものは世を離れては完全に存在することは出来ぬ」)そして、エチケットは何のためか？

嘉納治五郎が与えたあまり明瞭でない理由から始めましょう。良い姿勢を保つことは、体の器官のバランスと正しい機能のために良いし、また身体構造のためにも良い。同様に、人の体を美しく表現することもできます。[C-i-a-M43-12]

しかし、エチケットの社会的な意味は、先ず、社会があなたに期待するように行動し、そして2番目に、



他人を当惑させたり、悪い印象を与えないことです。[C-i-b-T6-11]

もっと正確には、礼儀とは何か？

礼儀とは、社会の秩序を守り、社会の調和のために行動しながら、内なる感情を、外に表現することです。[C-i-c-M43-12]一言の言葉が無くても、私たちの行動を通して、他の人たちに、私たちを理解し、私たちを見抜く手立てを与えます。こうして、形が心に影響を与える一方で、感情の本質が、形に影響を与えます。[C-ii-a-1-M43-12]

さらに、マナーについて語るならば、人がお辞儀をしている仕方によって、お辞儀の相手に対する感情が、非常に明確に作られます。[C-ii-a-2-M43-12]

それでは、マナーの欠如によって、どんな結果がもたらされるのでしょうか？

正しい行動ができないことによって、社会に適応できないことが暴露され、他の人々への興味を欠如していることが露呈されます。そして、その見返りに予想できることは、ただ軽蔑を受けることだけです。[C-ii-b-M42-10][C-ii-b-M43-12]

D. 柔道は、どのように役立つのでしょうか？

こうして、良いマナーを持った人は、幸せな人生を送るチャンスを得ます（恵まれた健康、他の人々からのよりよい配慮）。さらに、この領域で、改善を試みることによって、「自己実現」のために、自己を作りあげることになります。[D-i-M43-12]

日々の実践によって、柔道によって、道場における私たちの行動に注意を向けるようになり、私たちのお辞儀の仕方、他人との関係を意識するようになり、そして、特に重要なときには、いかなる状況のもとでも、正しく行動できるようになるのに役立ちます。[D-ii-M42-10]

どうして柔道がこの領域においてそれほど効果があるかという点、私たちは、毎日他の人々と関係を持ちながら生きていますが、その中では、尊敬の念を示さなければなりませんし、礼儀正しくないとなりませんし、また、悪い、非道な、不適當な行動から、自分たちを抑制しなければならないからです。先生は、社会の表現である道場で私たちが悪いそのときに、私たちの悪さについて語ることができます。そこで、私たちは、容易にそして自然に学ぶことができ、自分たちのマナーや行動を直すことができます。最後に、合理的なもののために私たちの差し迫った必要（嘉納師範の言う「合理的の欲求」のために私たちの「利根的の欲求」）をコントロールすることは、努力なしに、学んだり、経験している（制する (M22-5) セルフ・コントロールです。それは、ぶっきらぼうなマナー、軽薄な振る舞い、マナーの欠如、および、いくらか困難な状況を克服することができないこと、つまり嘉納師範の言う「懦弱に流れて艱難に勝てず礼儀節操を知らずして浮薄の風」に対する薬となります。[D-iii-M22-5]

そして、もっと興味深いことに、大急ぎや強制なしに、スムーズに行われることです。嘉納治五郎は、よく、「自然に」という言葉を使いました。

・涵養

[名] (スル) 水が自然に染み込むように、無理をしないでゆっくりと養い育てること。(徳性を)

・薰陶

[名] (スル) 《香をたいて薫りを染み込ませ、土をこねて形を整えながら陶器を作り上げる意から》徳の力で人を感化し、教育すること。

・感化

[名] (スル) 考え方や行動に影響を与えて、自然にそれを変えさせること。または、進歩的な方法です。

[D-iv-M42-10] [D-iv-T6-11]

E. 結論

嘉納治五郎の著作の中でも、時代の違いや状況によって、形において異なるところがあります。最も重要なことは、出来るだけ良い形での心の誠実さです。

この形は、心に影響を及ぼすので、道場の内外において、柔道を有益な効果のあるものにします。

それにもかかわらず、節度のある礼を柔道修行者に強制的に要求していることが初期の著作よりも後期の著作にみられます。これを嘉納が目撃した精神的な礼法に対する誠実さの衰退に対する取り組みと推察しなければならぬのでしょうか。

II. フランスの柔道修行者と礼儀

A. フランスにおけるエチケットの認識

全体的な状況について、最初に一言述べましょう。フランスでは、お辞儀をしないで、道場に入る修行者、または、お辞儀のように見えることをする修行者、また道場に入ることを意識していることをはっきり示すために、軽い会釈のようなことをする修行者はほとんどいません。さらに、ほとんどのトレーニングは、座礼のお辞儀で始まり、終わります。乱取りの場合には、ほとんどの道場では、単なる会釈であってお辞儀のようなものはあります。

柔道の世界以外で、フランスでこの考えがどれほど広まっているかを示すことができるので、注目するのは、両親のことで、親が子供を連れて最初に来たときには、少し緊張しており、どのように行動すべきか、実際には知りません。彼らは、他とは異なった場所で、特別な場所に入ることを意識しており、作法があることを知っているにもかかわらず、その作法を知らないことを表しています。

エチケットを教えるにあたって、フランス柔道連盟は、最初から、柔道修行者のために、道場だけでなく、毎日の生活における特別なエチケットの考えを広めることを試みました。こうして、黒帯委員会は、8点の「道徳作法」を編集しました。最初の点は、「礼儀正しさ」(エチケット)で、その定義として、「礼儀正しさは、他人を尊重することである。」と書きました。この定義は、すべての問題を包含してはいませんが、嘉納治五郎の視点から、離れてはいません。

こうして、フランスでは、「礼儀正しさ」が、道場の壁に掲げられています。さらに、フランスでは、柔道修行者それぞれが、私たちが柔道のパスポートと呼ぶ、等級と結果を記録するものを持っています。その中には、柔道またはフランス柔道連盟についての情報も書かれています。子供や成人のためのパスポートがあり、その中には「道徳作法」も書かれています。「礼儀正しさ」を柔道バッグやポケットに入れていくことになります。

しかし、勿論、道場でのお辞儀や良い行動の実際の教えは、道場でのみ行われます。言葉を通して教えられるかもしれませんが、主として、年長の修行者が、より若い修行者に、实例を通して教えます。

フランスの道場では、両極端を見ることができます。先生の中には、生徒が、裸足で部屋を替わることや、帯を結ばないで肩にかけていることを許す先生もいますが、一方、草履をはいていなければ畳の上に入れない、柔道着をきちんと着ていなければならない、帯は正しくしめていなければならない、お辞儀が完全でなければならないと、厳しい先生もいます。また、草履を畳の横にきちんとそろえていることに気を配る先生もいます。



フランスで、道場から道場を回る柔道修行者は、エチケットに厳格なことで、一方欠如していることに驚き、自分の先生から教わることを比較します。

フランスでは、この領域は、統一されていませんし、形も統一されていません。先生次第であり、お辞儀は、多かれ少なかれ重要であり、しかし、一般的なルールとして、皆がお辞儀を真似ようとしています。柔道修行者のお辞儀、行動、態度は、多分重要な要素の1つですので、フランス柔道の歴史においては、規律のために、フランス人の熱心な興味の対象となりました。1960年代では、フランスでは、柔道修行者は、正直で、礼儀正しく、教養があり、自己規制ができ、感情を抑制でき、頼りにされる存在でした。このイメージは、嘉納治五郎に近いもので、まだ両親の頭の中にあり、だからこそ両親は、子供に柔道をさせたがるのです。少年であれ、少女であれ、ほとんどのフランスの子供たちは、その人生で、少なくとも1年は柔道を経験するのはこのためです。

しかし、このイメージは、次第に、ますます、色あせてきています。

B. ショーウィンドーまたはハイレベルな柔道

ハイレベルな柔道は、概して、フランスの柔道の現実を表してはいません。しかし、国際試合で目撃しますし、メディアのせいでもあるので、ショーウィンドーについて、一言述べましょう。

私が柔道を始めたときに、それほど以前のことはありませんが、先生たちは、競技会の試合の終わりにお辞儀をした後で、対戦相手のもとへ行って握手をしてはならず、畳から直接離れるように説明していました。

今日では、ほとんどの試合の後で、対戦相手と握手する光景を目にします。これは、1つの傾向ですが、楽観的に見て、肯定いたします。

実際、この行動を通して、相手に触れることによって、私たち西洋人が、離れてお辞儀することを通してほとんど表現できないものを、修行者は表現したいのです。確かに指導不足ではありますが、ほとんどの西洋人にとっては、立礼よりも、握手することによって、自分の感情を表現し易いのです。しかし、少し悲観的な言い方をすれば、私たちは相手のお辞儀に対しておごなりなお辞儀しか返していないからであるとも言えます。握手するためには、両方の修行者は、手を差し伸べなければなりません。それは、身体的、精神的な関係改善のためのお互いの努力です。それは、立礼でなされなければなりません、そうでない限り、握手は、本質的な問題ではないと考えます。

一般的には、競技会では、握手は限られ、握手は毎日のトレーニングで見られるだけであることを明らかにしたいと思います。

握手に厳しい考えを持つなら、次の例をどう考えますか？

アトランタのオリンピックの Djamel Bouras と古賀稔彦の決勝戦を思い出してみましょう。戦いを終えて、Bouras は畳に座って、写真のために、親指を突き上げたポーズをとりました。

この態度は、柔道よりサッカーでよく見られますが、多くの理由で適当ではありません。

まず、嘉納治五郎の自制心の考えはどうなりますか？ 対戦相手を尊重する考えはどうなりますか？

私たちの訓練のための最大のショーウィンドーであるオリンピックの試合で起こりました。そのイメージは地球上のどこにも放送されました。そして柔道修行者でない人々によって見られました。私は、主に、柔道修行者でない人々によって見られたことを強調します。それは、ほとんどの人々は、4年ごとに1回柔道を見るだけであることを意味します。そして、この種のイメージを見るのです。一瞬にして、すべての柔道のエチケットを打ち壊します。人々の心の中では、柔道の畳の上で、このように振舞うことが、す

ぐに正常なことになり得るのです。人々の心の中では、それが、柔道のチャンピオンのすることになるのです。そして、それが、いかなる種類の行動のためにも、開かれた扉になるのです。

柔道修行者の態度やエチケットにもっとルールがないならば、カラーの柔道着はどうでしょうか？修行者でない観客を喜ばせるために、原則を損ねるところまで、何故競技のルールを変えるのでしょうか？

しかし、とりわけ、それが相手を打ち負かすための始めになるのです。先生にとっては、小学生に対して、近隣の決勝戦の1回目の勝利の後で、あちこち飛び回って喜んではならないと説明することが難しくなっています。それは、小学生が賞賛し、フランスを代表するチャンピオンが、そうするからです。さらに、メディアが、そのようなイメージを好みます。メディアはお金を稼ぎたいのです！そこで、勝利した場合には、勝利だけでは不十分で、ショーを演じなければならないといった考えが生じるのです。

アトランタ・オリンピックは12年前でした。Teddy Riner について語りましょう。若くて素晴らしい修行者で、世界チャンピオンで、メディアに好意的で、メディアの取材も多く、彼は、正しくお辞儀をして（多くの他の修行者たちに較べて）、畳の上で非常に素晴らしい行動を取っていました。さらに、姿勢が良く、非常に優れた柔道の技術を持っていました。北京オリンピックでは、彼は銅メダルを獲得しました。しかし、それだけでは充分ではありませんでした。なにかもっと新聞記事になることをする必要がありました。そこで、手をあげてジャンプしました。彼は、この種の行動には慣れていました。ブラジルでのワールド・チャンピオンシップでの勝利の後では、写真に向かってウインクし、畳の上で踊り、そして、ロックスターのように、観客が騒ぎたてるように仕向けました。良い柔道修行者であること、ワールド・チャンピオンシップやオリンピックで勝つことだけでは充分ではないのです。ショーを演じなければならない、柔道修行者からスターにならなければならないのです。

Teddy Riner は、試合の間、対戦相手に尊敬の念を示す素晴らしい人なので、見るにたえないことはありません。しかし、本当に恐ろしいのは未来です。Riner 自身は若く、写真やカメラマン、そしてトリプルスピンなどを期待して来る子供たちに対して、なにか新しいこと、毎回もっと素晴らしいことを見つけなければならないでしょう。そして、もし見つけられなければ、彼らは失望するでしょう。しかし、その後にならぬのでしょうか？ショーを演じる自分自身の演技を見つけなければならないとはどうしたことなのでしょうか？

どこまで行くのでしょうか？おかしな比較ですが、大相撲の横綱が、土俵の上でジャンプするのを見ると思いませんか？考えられないことです。—初めてそんなことが行われるまでは、柔道では、どうしてそれができるのでしょうか？

簡単で素早い回答はありません。柔道は、日本の精神的な本質を有する一種のイメージとは、関係が少ないのです。力士と柔道修行者の役割は同じではありません。多分、柔道は国際的な訓練になり、その結果、他のマナーや他の自己表現の影響を受けたからです。しかし、嘉納治五郎研究の視点から見ると、柔道修行者が原則を忘れて、柔道を単なるスポーツにしたことが主な理由です。そして、スポーツでは、今日では、人々はこのように振舞います。

しかし、私たちは、ここで極端なケースについて語っています。不運にも、氷山の見える部分であるとしても、また、創設期までの反動があるとしても。

C. 実例の力

上に述べたように、若い柔道修行者が、ハイレベルな競技で見ることができると考えると、問題の1つは、私たちが行う必要がある教える努力です。



発表者の意図は、それを非難することではありません。なぜなら、多くの良い点があるからです。しかし、不幸にも、もし逸脱した行動が、最初にショッキングであれば、それらが心の中にあり、そして次第に標準的なことになることが明らかです。

今、畳の上での柔道修行者の態度について語るができるならば、彼らの公的な生活における態度についても同様に語るができます。レフェリーの判定を試合中に非難している前の有名な柔道修行者についてはどうでしょうか？その後では、どのように、子供たちにレフェリーの判定を受け入れるようにすることができるでしょうか？

嘉納治五郎が語るように、柔道修行者は、自分自身を社会的な存在として考えなければなりません。そして、柔道を通して、社会に役立つ技術を獲得し、発展させなければなりません。ときには、社会がその技術を、道場に紹介しています。

嘉納治五郎が語るように、世界には、いたるところにマナーがあります。そして、それらのマナーは、文化によって異なるものであり、あらゆる文化が、柔道のエチケットに対して、同じように反応することはありません。

2001年に立ち上げたこのウェブサイト (HYPERLINK "<http://www.judochampions.com/bowing.html>" "<http://www.jūdōchampions.com/bowing.html>) について語るができます。このウェブサイトは、柔道のお辞儀に反対して、お辞儀を、自分たちがかわりたくない宗教的な儀礼と同じものとしています。例えば、フランスには、大きな回教徒のコミュニティがあります。この宗教では、神の前でのみお辞儀をします。しかしながら、一般的には何ら問題はありません。しかし、お辞儀には宗教的なバックグラウンドはないこと、しかし、相手に対して、自分の内なる心の状況を表現し、同じ心の状況を共有していることを表現するものであることを説明しなければならないことを認識する必要があります。

このように、柔道の先生は、異なる感性に気を配り、あいまいさを残さず、できるだけ明瞭に説明することができる、柔道の異なった要素を認識しなければなりません。それは押し付けることではなく、説明することです。

もう1つの現象について語らなければなりません。それは、今人気のあるブラジルの柔術のような、柔道に近く見える訓練のインパクトについてです。面白いけれども、— 柔道との系統を宣伝するのでなおさら — その作法は、柔道とは異なり、人々が好むものにより近いものです。柄入りの柔道着、色つきのロゴ、お辞儀はしないで、相手の手をたたく。もっと娛樂的です。フランスでは、修行者の多くが、柔道から来ており、彼らが柔道の道場に帰るときに、これらの新しい作法を適用します。これらもまた、固有の作法になります。

同様に、自由闘争の現象もあります。関連はありますが、しかし、いくらか異なると思います。そして、吉田秀彦のような偉大なチャンピオンが、この世界に入ると、地球の反対側で行われても、基準が消えるので、柔道界は震撼します。

フランス柔道の最も大きな問題で、心配な点について述べます。先生についてです。フランスでは、先生が、ますます若く、経験が少なくなっています。しかし、最も悪いことは、失業率の高い社会では、よくあることですが、学校に行けない若い人々が、柔道の先生になることを選択することです。情熱があるからでも、なりたいからでもなく、他の選択がないからです。

充分教育を受けておらず、充分成熟しておらず、社会の影響の中で、必ずしも良い選択をすることができなくて、ときには、誘惑に負けることもあります。彼らの姿勢は明確ではなく、外見上は、柔道の嘉納治五郎が私たちに与えたものといくらか類似していても、ハイレベルな競技の目的、自由闘争やブラジル

禮

の柔術の目的が、興味深い点があるとしても、人のポテンシャルを発達させ、社会において他人から頼られる原則を学ぶこととは異なるものであることを説明することができません。

この状況を考えると、また、他人を倒し、たとえ年長者であっても、もっと経験を積んだ人であっても、もっと教養のある人であっても、人に頭を下げるなど私たちに教える資本主義経済を考えると、自他共栄のようなものを、いかにして推進することができるでしょうか？

幸運なことに、模範的な態度はそれが無名修行者であっても周囲に感化力を及ぼします。

それらの絵の上で、すべての年代の修行者が、一緒に練習をしているのを見ることができます。中学生、高校生、大学生、サラリーマン、退職した人たちが、柔道のお蔭で、みんな一緒に、時間と情熱を共有しています。

この絵の上の誰もが、自分の自由時間の中で、ヒーローであることを理解しなければなりません。ほんのわずかの人を除けば、ここでは、誰も柔道を教えて生活している人はいません。彼らは、家族を離れて、休日を取って、1週間の間、午前も午後も柔道をするために来ている情熱的な人々です。

しかし、もう1度見てください。帯は上手に結ばれていません。正座をしていません。自然体で立っていません。けれども、彼らは用心深く、注意を怠りません。そして、そこでは、正式なルールがすべて尊重されていませんが、価値のあるものがあります。若い修行者は、年長者の存在によって、感銘を受けます。それは、柔道に来ることを選択することがどれほど難しいかを知っており、想像することができるからです。そして、誰から何も言われなくても、彼らが、遠い昔に、競技を通じた栄光の希望を捨てているにもかかわらず、20年、30年、40年、50年の練習の後にも練習を続け、道場に通い続けるのには、柔道には特別なものがあるにちがいないと考え始めるのです！

しかし、さらに付け加えれば、彼らは楽しんでいるのです。

それらのイメージでは（子供たちは）、厳格ではなく、楽しいのです。ときには非常にルーズでも、彼らは作法を知っています。お辞儀する前に、柔道着を直す習慣、相手と対するとき、離れるときに姿勢に注意することは、彼らが毎日の生活に置き換えている基本です。

Ⅲ. 結 論

結論として、フランスの柔道修行者はエチケットを認識しています。たとえ、形が固定していなくても、明確でなくても、また、ときには、人が自分を形成する規律としての柔道と、スポーツとしての柔道との間の境界が、どんどんルーズになって、スポーツ側にどんどん偏ってきても。将来のために、心配な行動にも、注目することができます。

しかしながら、フランスの柔道を救う要素があります。自分の自由時間を、練習したり、教えることに使う何千人もの無名の修行者の誠意です。彼らは、お金も、栄光も、何も期待してはいません。彼らの唯一の大きな望みは、自分たちが好きな柔道を、価値のある宝物として、次の世代に伝えることです。そして、柔道の有益な効果を自分自身が体験することです。

従って、多分、粟津正蔵九段と、形を超えて「重要なものは心である。」と語ることができます。

嘉納治五郎がその当時に感じたのと同様、その「心」に媒体、あるいは三船久蔵十段が言ったように、器を与えるために、形・外形に固執することを必要とする時代がフランスに訪れてきたようでありませ

禮



- ・『柔道一斑並ニ其教育上ノ價值』、大日本教育界依頼による講演録小冊子、明治22年5月。
- ・『同窓会雑誌の発刊につきて』、『嘉納塾同窓会雑誌』第一号、明治26年8月。
- ・『勝負後の講話（つづき）』、『国土』第二卷十号、明治32年7月。
- ・『講道館柔道講義－第八回』、『国土』第三卷二十号、明治33年5月。
- ・『柔道を学ぶ者の心得について－第二回』、『武徳誌』第四篇第十号、明治42年10月。
- ・『青年修養訓』、同文館、明治43年12月。
- ・『柔の形』、『柔道』第一卷第二号、大正4年2月。
- ・『柔道家の品格』、『柔道』第三卷第十号、大正6年11月。
- ・『柔道教本上巻』、三省堂、昭和6年9月。
- ・『乱取の練習および試合の際における注意』、『柔道』第六卷第六、昭和10年6月。
- ・『柔道 / 柔術』、日本国有鉄道 / 観光業委員会、ツアリスト・ライブラリー16、東京、1937年、70ページ
- ・『講道館柔道概説（第一回）』、『柔道』、大正4年2月、p. 124。
- ・『講道館柔道概説（第一回）』、『柔道』、大正4年2月。
- ・『倫理学一歴史、批評』、棚橋一郎、嘉納治五郎、哲学館、明治21年。
- ・『倫理学トハ如何ナルモノゾ』、日本大家論集、武田書店、明治21年1月。
- ・『己のためか世のためか』、『柔道』、大正6年1月、p. 250。

パネリスト講話



禮